

## 4月名画座企画 「黒澤明特集」

### ・ 作品概要

『生きる』(1952年)

いのち短し 恋せよ乙女…… いま甦る《黒澤明》永遠の名作!



三十年間無欠勤の市役所の市民課長・渡辺勤治はある時、自分が癌に冒されている事を知る。暗い気分の勤治に息子夫婦の冷たい仕打ちが追い打ちをかける。街に出て羽目はずすが気は晴れない。そこで事務員の小田切とよと出会い、今までの自分の仕事を反省する。勤治は心機一転、仕事に取り組むが……。

死に直面した公務員の生き方を通して、人間の真の生き甲斐を問いかける感動作。主人公を通して社会への批判も鋭く描かれていて考えさせられる。主人公を演じる志村喬は、鬼気迫る演技で名優としての地位を確立。夜更けの公園のブランコに乗って「ゴンドラの唄」を口ずさむシーンは、多くの人々に感銘を与えた。(引用元：楽天市場)

『天国と地獄』(1963年)

身代金を厚さ7センチのカバンに入れて「こだま」に乗れ!



ナショナルシューズ重役・権藤の息子が何者かによって誘拐されるが、被害にあったのは実は運転手の子どもだった。犯人は人違いをしていたのだ。犯人は疾走するこだま号に身代金を持って乗り込むよう要求してくるが、捜査陣は犯人の正体さえつかめない。そして事件は意外な展開を見せる……。

全編に渡って圧倒的な緊張感が溢れており、中でも日本映画史上に残るほど有名な、身代金奪取の意外なトリック・シーンが圧巻。他の犯罪映画とは一線を画したリアルなドラマ展開に、映画ファンのみならず世間が注目。日本映画では考えられないダイナミックさで、誘拐犯と捜査陣との息づまる対決を描くサスペンス映画の決定版。(引用元：楽天市場)

『七人の侍』（1954年）

映画史上、最強最高の面白さ！ 全世界が熱狂した「七人の侍」登場！！



戦国時代、野武士達の襲撃に恐れおののく村があった。村人達はその対策として、用心棒として侍を雇うことにする。侍さがしは難航するが、才徳にすぐれた勘兵衛を始めとする個性豊かな七人の侍が決まった。最初は侍を恐れる村人達だったが、いつしか一致団結して戦いに挑むことに。しかし戦闘は熾烈を極めた……。

破格の制作費と年月をかけて作られた日本映画史上空前の超大作であり、世界に誇る日本映画の最高傑作。マルチ・カメラ方式の導入等による斬新で臨場感溢れる映像。加えて徹底した時代考証や緻密な脚本により、実際にあったかのような錯覚に陥らせる。迫力ある本作品は、年月を経た今も人々に感動を与え続けている。(引用元：楽天市場)

・解説

「黒澤明」（1910年～1998年）

日本映画は映画史の表舞台にはあまり出てきませんが、独自の進化を遂げてきました。優れた日本の映画監督は世界中の映画監督に多大な影響を与えています。『東京物語』<sup>1</sup>の小津安二郎<sup>2</sup>、『雨月物語』<sup>3</sup>の溝口健二<sup>4</sup>、『浮雲』<sup>5</sup>の成瀬巳喜男と並ぶ、世界的にその名の知ら

---

<sup>1</sup>家族の繋がりと喪失をきめ細やかに描いた傑作です。低い位置で固定されたカメラが落ち着いた雰囲気醸し出しており、この演出法は「小津調」と形容されます。

<sup>2</sup>世界で最も動的な映画を撮った監督が黒澤明なら、世界で最も静的な映画を撮った監督は小津安二郎であるとされ、日本映画は動の黒澤と静の小津の二大潮流に分けられるとも言われています。

<sup>3</sup>金と出世の欲に駆られる男性と、その犠牲になる女性を幻想的に描いた傑作です。撮影技術、照明、音楽、演技などの技巧が美しく調和しています。クレーンを用いたワンシーン・ワンカットの手法が幽玄な雰囲気を醸し出しています。『雨月物語』で完成させた長回しの手法は、フランス・ヌーヴェル・ヴァーグの監督たちに多大な影響を与えました。

<sup>4</sup>黒澤明は小津安二郎と溝口健二を尊敬していました。『赤ひげ』の主人公の両親役には笠智衆と田中絹代がキャストिंगされました。自身の先輩である小津安二郎監督作品の看板役者であった笠と、溝口健二監督作品に多数出演した田中を自身の映画に出演させることで、2人の日本映画の巨匠への敬意を込めたと黒澤明は語っています。

<sup>5</sup>思わせぶりの言動で何人もの女性を魅了し、自分が満足したらやり過ごし、ニヒルな態度で責任から逃げ続ける主人公と、惚れた弱みで主人公に追いつがるしかないヒロインの、感情の微妙なすれ違いを巧みに描いた傑作です。魅力的なセリフ群が、成瀬巳喜男の巧みな編集で無駄なくまとめられています。主人公は悪い、ヒロインが可哀そうといった善悪二項対立的な観方では作品の本質を見失います。主人公は一度も暴力的なアプローチを行っていません。主人公の器量を超えた愛が注ぎ込まれば、逃げるしかないのです。二人の求めるものが異なっていたのです。単なるヒロインの悲劇ではなく、普遍的な人間像を

れた日本映画の四大巨匠の一人でありながらも、日本の映画監督の中で最もよく世界に知られているのは黒澤明だと私は考えます。黒澤明は映画制作のポリシーとして、完全主義を徹底させていました。この完全主義を徹底させた映画としては『赤ひげ』が有名です。『赤ひげ』は江戸時代の医者を描いた映画です。『赤ひげ』の中で薬箱の引き出しを開けるシーンは一回もありません。しかし黒澤明は、江戸時代の薬箱の中身について調べ、当時の薬を薬箱に入れて役者を演技に臨ませました。画面に映らない部分にこだわり、当時の雰囲気を実に再現することが役者の演技を決定付けると黒澤明は考えていたのです。最初は赤ひげの下で働くことに納得していない主人公ですが、清濁併せ持つ貧しい人々の治療に励む赤ひげに感化され、養生所に自分の居場所を見出していきます。その感情の微妙な移り変わりが巧みに描かれています。黒澤明は時代劇に秀でていて、優れた時代劇の映画を多数制作しています。『七人の侍』以外では『影武者』と『乱』が有名です。黒澤明は、『乱』のリハーサルとして『影武者』を制作したと語っていますが、衣装や背景などの色彩が豪華かつ壮麗で、黒澤明の独特な色彩センスが評価されています。黒澤明は『乱』を、自分の「ライフワーク」と位置づけ、「人類への遺言」でもあるとしました。黒澤明は、「この作品が完成したら映画監督を廃業しても良い」とまで公言しており、『乱』に懸ける並々ならぬ情熱が窺えます。ヒロイズム的に侍が描かれており、娯楽性が重視されている『七人の侍』とは対照的に、『乱』はエゴイズムのために互いに殺しあう人間の愚かさが描かれており、芸術性を重視したものとなっています。架空の戦国武将である一文字秀虎を主人公に、その晩年と3人の息子との確執と、兄弟同士の争いを描いています。物語の大筋はウィリアム・シェイクスピアの悲劇である『リア王』で、毛利元就の三本の矢の逸話なども取り入れられています。「毛利元就の3人の息子たち、これは素晴らしい息子たちで、そのおかげで毛利はあれだけ栄えたが、もしそうじゃなかったら、と考えた。それが『リア王』と交じり合っこんな作品ができた」と黒澤明は制作の意図について語っています。血を求め、血に狂う人類の闘争の歴史の醜悪さを抉り出す凄まじい作品です。複雑な人間関係が描かれますが、三兄弟を黄、赤、青のテーマカラーで色分けする、三兄弟の名前が太郎、次郎、三郎と分かり易いなど、観客を混乱させないための配慮が十分に為されているため、登場人物たちが互いを蹴落とすために権謀術数を巡らせる様相を臨場感をもって体感することが出来ます。仲代達矢が演じる一文字秀虎の旗印は太陽と月ですが、これは黒澤明の「明」を図案化したものです。黒澤明は『乱』に末の方として出演している宮崎美子に「秀虎は私だ」と語っています。一文字秀虎は黒澤明自身を強く反映した登場人物なのです。脚本の初期稿段階では、一文字秀虎が側近達に裏切られる過程がより詳細に描かれていました。そのため事情を知っている人には、登場人物のモデルが誰なのか分かつ

---

リアリズム的に描いた作品なのです。溝口健二は『浮雲』を「あの人のシャシン（映画）はうまいことはうまいが、いつもキンタマが有りませんね」と評価しています。これは『浮雲』では抑制的に感情が表現されていて、観客の感情を盛り上げることを主眼とするハリウッド的ラブストーリーとは異なることを示しています。

たそうです。黒澤明はリハーサルの鬼と言われています。『乱』では撮影の4ヶ月前からリハーサルを開始していました。仲代達矢の演技の魅力は、その眼力を中心にして生み出されていますが、仲代達矢の口上の見事さも魅力の一つです。他の監督の出演者とは演技の質が違います。「リハーサルが一番大事なんだ。ずーっとリハーサルをやっていくうちに、衣装も役者の体に合ってくるし、無駄な動きもなくなってくる。セリフだって不必要なものがわかってくるんだ」と黒澤明は語っています。仲代達矢を始め、役者たちが優れた演技で狂気を表現する『乱』ですが、原田美枝子が演じる楓の方の狂気の表現が飛び抜けて優れています。「蛇がとぐろを巻くような声で」「真綿で首を締めつける様な声で」演じてくださいと原田美枝子は黒澤明に指示されました。黒澤明は女の情欲を描くことに長けています。『羅生門』の京マチ子、『七人の侍』の津島恵子、『蜘蛛巣城』の山田五十鈴<sup>6</sup>、『赤ひげ』の香川京子などの女優が女の情欲をむき出す優れた演技を見せています。『乱』は、スティーヴン・スピルバーグ監督の『プライベート・ライアン』の序盤の約20分間のオマハ・ビーチにおけるノルマンディー上陸作戦を描く戦闘シーンでオマージュされています。このシーンは映画史に残る20分間として知られています。その他にも、2007年に『椿三十郎』、2008年に『隠し砦の三悪人』がリメイクされています。しかしこのリメイク版の二作品は、映画秘宝で発表されていた、その年の最低の日本映画を決定するHIHOはくさい映画賞の、『椿三十郎』は生涯功労賞、『隠し砦の三悪人』は最低監督賞を受賞しています。リメイクされる程の傑作であるということだけ頭に置いて、黒澤明監督作品を鑑賞して下さい。黒澤明の『椿三十郎』と『隠し砦の三悪人』は非の打ち所の無い傑作です。撮影技術が進歩したとしても、黒澤明監督作品の躍動感には敵いません。背景の細部にまでこだわる完全主義が生み出す現場の雰囲気、役者の力量を最大限に引き出す演出のセンス、入念なリハーサルによって生み出された無駄なセリフのない自然な展開、細部に渡って何人もで反復され書き直され練り上げられた脚本など、映画に関わる全員の最大限の力を引き出した黒澤明の力があってこそ完成した映画なのです。芸術とは再現ではなく創造です。リメイクとは、原作の表現を変えて新しいものを創造出来る伸び代がある場合にのみ為されるべきです。それ以外のリメイクは、過去の傑作の権威を借りた劣化コピーで小銭を稼ぐ行為であり、芸術に対する冒涇です。『椿三十郎』は『用心棒』の続編として位置付けられています。『用心棒』での三船敏郎の役名は桑畑三十郎です。『用心棒』は三船敏郎が対立するやくざの両方に用心棒として売り込みながら、巧みに同士討ちさせるエンターテインメントです。その殺陣での当時としては画期的な試みが評価されました。今ではよく見られる演出ですが、侍同士の対決シーンで、すれ違いざま刀を振り下ろし、いったん静止して片方が倒れて死ぬという描写や、効果音としての刀の斬殺音の使用は『用心棒』が最初の試みでした。しかし黒澤明は、『用心棒』と『椿三十郎』の最大の魅力は

---

<sup>6</sup>黒澤明監督作品中最も観客に恐怖を抱かせる女性は、『乱』の楓の方と『蜘蛛巣城』の浅茅だと私は考えます。山田五十鈴が、妄執と欲望によって徐々に精神に異常をきたしていく優れた演技を見せています。

殺陣のシーンではなく、主人公の三十郎の特異なキャラクター設定にある」と主張しています。『椿三十郎』では野性味あふれる三十郎と対比される存在として、入江たか子が演じる奥方と、奥方の娘として団令子が演じる千鳥が登場します。この対比が絶妙で面白いのです。「でも助けられてこんなこと言うのも何ですけどすぐ人を斬るのは悪い癖ですよ」「あなたは何だかギラギラし過ぎてますね。あなたは鞘のない刀みたいな人よく斬れます。でも本当にいい刀は鞘に入ってるもんですよ」と、三十郎が乱暴に事を運ぼうとすれば、緊張感の無い声で奥方に諭され、三十郎も絶妙な表情をしながら奥方に従います。全く違う生き方だからこそ、お互いに一目置いているのです。奥方と千鳥がいたからこそ、『椿三十郎』は一本調子でない魅力的な映画になりました。三十郎が奥方と千鳥のために四つん這いになり、踏み台になって奥方と千鳥に塀に登らせるシーンがあります。奥方と千鳥により、男臭さを表現しながらも優しさを併せ持つ三十郎の魅力が引き出されています。『椿三十郎』は魅力的なセリフに溢れています。物語の中の登場人物が生きているのです。黒澤明の全てに対する徹底したこだわりがあったからこそ、セリフの一つ一つに命が吹き込まれているのです。年齢が30代だから三十郎で、目の前の椿が満開で綺麗だから椿が苗字と適当に決め、名前にすら頓着していません。何者にも縛られない自然な風体に、現代人は本心では憧れているのです。三船敏郎の絶妙な表情で放つ魅力的なセリフと相まって、椿三十郎の魅力に引き込まれていきます。『隠し砦の三悪人』では、百姓の浅知恵にお姫様の一行が便乗し、同盟国へ落ちのびるべく奮闘します。ここには、色々な立場の人々の意見がより良い結果を生み出すはずだという黒澤明らしい柔軟さが描かれています。二人の百姓、一人のお姫様、一人の名うての侍大将という、全く違う三つの階級が歯車のように連動し、物事を見事に成功へと導きます。これは黒澤明が理想と考えてきた社会の本来のあるべき姿です。人徳のある君主、冷静さと行動力の伴った家臣、文句を言いながらも狡猾に生きる民の力が一つになった時、あらゆる障害は取り除かれ、お互いがお互いを吸収し合い、社会は発展するのです。二人の百姓は金塊を見付けては仲違いし、仲直りしたと思ったら仲違いします。ここには人間の生命力が描かれています。この強欲な二人の百姓の掛け合いの面白さが『隠し砦の三悪人』の魅力の一つです。一人は国境を目指し、一人は一稼ぎするために町へ向かい別れます。しかし結局敗残兵として捕まった二人の百姓は、金塊掘りをさせられ再会します。この流れはジョージ・ルーカス監督の『スター・ウォーズ エピソードIV/新たなる希望』の冒頭の流れでオマージュされています。『スター・ウォーズ』シリーズに登場するC-3POとR2-D2のモデルは『隠し砦の三悪人』の二人の百姓です。二人の百姓は、追い詰められながらも死ぬことを微塵も考えていません。ここには、恵まれていた姫と侍大将は潔い死を受け入れ、二人の百姓はただひたすら生にしがみつこうとする構図が描かれています。黒澤明監督作品の有名作品への影響を挙げていきます。『悪い奴ほどよく眠る』の序盤の結婚披露宴のシーンで登場人物の関係を説明する手法は、フランス・フォード・ Coppola監督の『ゴッドファーザー』の序盤でオマージュされています。「最初からヒットを狙う作品は観客には無礼である。何か意義のある題材は無いららう

か」と悩んだ黒澤明は、興行収入よりも汚職の現実を抉り出す芸術性を重視した作品を制作しました。スリリングな社会派サスペンスの傑作です。『蜘蛛巣城』の冒頭の霧の中から城が現れるシーンは、スティーヴン・スピルバーグ監督の『未知との遭遇』の砂嵐の中から第二次世界大戦中に行方不明になった海軍機が現れるシーンに影響を与えているとされています。『蜘蛛巣城』の三船敏郎が演じる鷲津武時が次々と矢を射かけられるシーンは、特撮ではなく、実際に三十三間堂の弓道の有段者が三船敏郎めがけて、至近距離、遠距離から何十本も矢を射ています。ウィリアム・シェイクスピアの『マクベス』、水墨画のようなモノクロの映像美、能舞台の演出方法を取り入れた合理的で重々しい武家の所作など、西洋の物語と日本の文化を融合させ、人類普遍の人間の愚かさや哀しさを描いた作品です。『野良犬』の拳銃を盗まれた新米の主人公をベテランの佐藤が叱責するシーンは、『スター・ウォーズ エピソードII/クローンの攻撃』のライトセーバーを落とした弟子のアナキン・スカイウォーカーを師匠のオビ=ワン・ケノービが咎めるシーンでオマージュされています。『野良犬』の落ち着いたベテラン刑事である志村喬と苛つく新米刑事である三船敏郎というキャラクターは、デヴィッド・フィンチャー監督の『セブン』におけるモーガン・フリーマンとブラッド・ピットのキャラクターに影響を与えています。『セブン』のクライマックスの犯人との一騎打ちの場面で、それまで降っていた土砂降りの雨がピタリと止むシーンは、『野良犬』へのオマージュです。『野良犬』は刑事物の先駆けとされる作品です。無駄の無いプロットの現代劇の傑作です。戦後直後の東京がある意味での主役であり、戦後の街並みと風俗をありのままに描いています。時代の現実感と喪失感が、作品に深みを持たせています。戦争から復員してきた二人の若者が、同じような悲惨な目にあっても、その人の持つ人間性次第で、追う者と追われる者に分かれていくという、黒澤明らしい善悪対比の構図が描かれています。

#### 『生きる』(1952年)

三十年間保身だけに努めてきた市役所の職員が初めて市民の嘆願に耳を傾けるストーリーで、官僚主義社会を批判しています。官僚主義批判は、『悪い奴ほどよく眠る』でも描かれたテーマです。『生きる』の官僚主義批判というテーマは、テリー・ギリアム監督の『未来世紀ブラジル』にも受け継がれています。死に直面し、得体の知れない恐怖に震えるありのままの人間の姿を描き、人間は何故生きるのかという問題を提起しています。ただ日々の糧を得て、家族を守るために黙々と働き続ける姿は生きているとは言えず、死骸も同然と黒澤明は言い切っています。「この映画の主人公は死に直面して、はじめて過去の自分の無意味な生き方に気がつく。いや、これまで自分がまるで生きていなかったことに気がつくのである。そして残された僅かな期間を、あわてて立派に生きようとする。僕は、この人間の軽薄から生まれた悲劇をしみじみと描いてみたかったのである」と黒澤明は制作の

---

7町人文化として繁栄してきた歌舞伎の軽さと華やかさとは異なり、観阿弥、世阿弥以来の武家の伝統として発展してきた能は、合理的で重々しい所作が特徴です。

意図について語っています。役所仕事に従事してきた人生は何も生み出しておらず、それは停滞した時間であったことを知ります。死への直面がもたらしたものは、自分の孤独の自覚と、今の状態を作りあげた過去の自分との対峙でした。「人生を楽しく生きようとすることは現代において美德である」という作家の言葉に従い、死から遠ざかるために、過去の自分に反逆して快樂に身を委ねます。しかし、死の意識は常に頭の片隅にありました。生を求めることは、生きることを楽しむ他者と死に行く自分との隔たりを浮き彫りにし、自分の孤独感を強めました。死と孤独から遠ざかるため、主人公はトヨと交流します。死と孤独の恐怖を和らげるための心の拠り所が欲しかったのです。トヨは、主人公とは対照的な生きている存在として描かれます。トヨに交流を拒絶され、何でそんなに私を付回すのかと質問されます。主人公には、「私にもわからない。ただ私にわかっていることは……」としか言えませんでした。ここでの10秒の無言の間に、作家との会話では死という言葉がすんなり言えたのに、今では言うことを躊躇している自分に気がきます。それまで遠ざかってきた死と初めて向き合ったのです。葛藤しながらも死を受け入れ、覚悟したのです。「どうしたら君のように活発になれるのか」という質問の答えから、主人公は自分の人生の意味を未来に残せることに気がきます。ここから主人公の停滞していた時間が動き始めるのです。映画の構成は巧みで、中盤で主人公の通夜の場面となり、後半は通夜の席に集まった人たちの回想として描かれています。これは他人の心に残る、すなわち未来に自分の人生の意味を残したことを示しています。

#### 『天国と地獄』（1963年）

モノクロ映像の中の一部だけに着色するパートカラーという手法は、スティーヴン・スピルバーグ監督の『シンドラのリスト』のシンドラに心理的影響を与える赤い服を着た少女のシーンでオマージュされています。警察の科学捜査と知能犯かつ愉快犯との攻防という現在でも通用するテーマは、当時としては斬新でした。『天国と地獄』以前の刑事物の映画では、黒澤明自身が『野良犬』で確立したような、刑事が歩き回って情報を収集して事件を解決するというプロットが主流でした。それを自ら否定し、新しい刑事像を作り出した作品です。警察の科学捜査の手法と刑法の知識を作中に多く採用した、筆跡の使用とプロファイリング、情報操作、連続写真撮影、逆探知、犯人の声の録音とその分析、刑法の抜け道と対処などは、当時としては世界的に見ても斬新な演出でした。黒澤明の人間に対するやりきれなさ、法律への疑問、追い詰められた人間の心理への深い洞察が描かれた作品です。三船敏郎が社会的に生きようと思えば進一君は死にます。進一君を生かそうとすれば、三船敏郎は人生に敗れます。密室なのでアクションはありませんが、追い詰められ、決断を迫られた深刻な状況がもたらす苦悩を目と表情だけで表現しています。平均ワンカットが五分という長丁場かつ使用されるのが応接間のみという圧迫感の中で、前半の一時間を完璧に演じています。ワンカットで撮り続けることは役者たちに多大なプレッシャーを与えますが、それ以上に監督と撮影スタッフにも緊張感を与えます。その結果と

して、緊張感のある完璧な映像が出来上がるのです。一時間を一つの部屋だけで映像として持たせることは至難の技ですが、マルチ・カメラ方式、長回しによる時間の寸断を出来る限りなくしたワンカット撮影、事前の入念なりハーサルによる完璧な立ち位置の確認によって、人物が被らないように工夫しています。応接間での室内劇である前半、密閉空間でありながらスピード感をも併せ持つ新こだまの車内での予想もつかなかった現金受け渡しの場面である中盤を挿入し、屋外劇で一気に犯人を追い詰めるスピード感に溢れる後半という構成になっています。前半と中盤においてギリギリまで閉塞感を観客に与えてからスピード感のある展開に持ち込む構成が後半での爽快感を強めており、優れた構成となっています。

### 『七人の侍』（1954年）

「日本の時代劇はみんな淡白。僕は、観客に、鰻井の上にカツレツを乗せて、そのまた上にハンバーグを乗せて、その上からカレーをぶっかけたようなご馳走を食べさせたかった」と黒澤明は制作の意図について語っています。207分という長い上映時間により、登場人物一人一人の人間性が深く掘り下げられていることが『七人の侍』の魅力の一つです。黒澤明は作品に命を吹き込むために、七人の侍と100人近い村人の容姿、性格、癖、家族構成、セリフなどをこと細かに創作ノートに書き込んでいました。オリジナル作品の権利許諾を得たハリウッドでの正式リメイク作品に『荒野の七人』があります。七人の侍が西部劇のガンマンに置き換えられています。『荒野の七人』でクリス・アダムズを演じているユル・プリンナーが『七人の侍』に感銘を受けて制作したオマージュ色の強い作品です。そのため、武士とガンマンでは思想が大きく異なるので相違した展開も多くありますが、大まかなあらすじ・登場人物の設定・台詞などの多くが忠実に再現されています。西部劇のガンマンと時代劇の侍には、一対一で戦う孤独な戦士であるなどの共通点があります。黒澤明は日本版の西部劇として『七人の侍』を制作しました。『七人の侍』の持つヒロイズムがアメリカ的だったからこそ、西部劇への置き換えが出来たと言えます。このアメリカ的なヒロイズムは、黒澤明監督作品がアメリカ受けする理由の一つです。この他にも『七人の侍』に影響を受けて、「腕利きの7人（または数人）の個性的なプロフェッショナルが、弱者を守る・秘宝を盗むなどの目的のために結集して戦う」というプロットの映画やドラマが数多く作られました。この代表例として『アルマゲドン』や『リーグ・オブ・レジェンド/時空を超えた戦い』、パロディとして『バグズ・ライフ』や『ギャラクシー・クエスト』があります。ストーリーへのオマージュとしては、『プライベート・ライアン』の町を要塞化して戦車を囲い込むシーンに『七人の侍』の影響が見られます。『七人の侍』の娯楽映画としての完成度が、世界の映画史に残るものであったことは間違いありません。武士が農民を虐げるといふ『七人の侍』における構図は、終戦直後の都市労働者（浪人・侍）と、闇の食料を買わなくて済む農家（百姓）という状況下で迫真性を発揮しました。『七人の侍』の評価の一つに、時代考証が正確無比だったことが挙げられますが、戦国史家の藤



木久志は、『七人の侍』が傑作であることを認めつつ、戦国時代の農民は基本的に武装し、状況に応じて兵士に早変わりする獍猛な存在であって、刀ひとつ持てないなどということはあり得ないと批判しています。現在の村の出発点は、山と水の広域管理のための農民の自治組織である惣です。惣の中心人物は長百姓、乙名と呼ばれて、また国人、地侍と呼ばれました。地侍というと武士のように思われますが、中世では武士身分は確立しておらず、大名の家臣を武士と言ったに過ぎません。惣は武装しており、戦国大名に匹敵する武力を備えていたのです。『七人の侍』は、歴史上の虚構の上に成立した作品なのです。『七人の侍』で固定された侍と百姓のイメージは、宮崎駿監督の『もののけ姫』によって覆されるまで時代劇において影響を持ち続けました。『七人の侍』における侍と百姓のイメージが強過ぎて、それ以降の時代劇では武士や農民ばかりがクローズアップされてきましたが、中世に実際に生きていたのは、武士や農民ばかりではありませんでした。中世の研究が進み、稲作農民に代表される平地の「定住民」とは全く別の生活圏を持つ「遍歴民（山民・海民・芸能民など）」が膨大に存在していたことが明らかになったのです。日本の本来の歴史でないとして、『七人の侍』における侍と百姓のイメージから脱却し、新しい枠組みを持つ時代劇を目指した結果、『もののけ姫』は武士や農民が表舞台に出てこない物語となったのです<sup>8</sup>。そのため『もののけ姫』には、かつての日本の正史には登場しない、大和との戦いに破れた蝦夷の一族の末裔（アシタカ）、人間に捨てられ<sup>9</sup>山犬<sup>10</sup>に育てられた娘（サン）、武士や農民とたびたび対立したタタラ者（エボシ御前）、不治の病とされた業病にかかった者<sup>11</sup>、本来は神聖な仕事を引き受けていた中世の非人<sup>12</sup>・山伏（ジコ坊）、貧しさ故に売られた娘、地走りと呼ばれる山の狩人などの「虐げられた者」「忘れられた日本人」が登場するのです。ここまで多数の作品を挙げたことから分かるように、『七人の侍』はその後の世界中の映画に多大な影響を与えたのです。

#### 「娯楽映画と芸術映画」

映画を構成する要素は、娯楽性と芸術性に大きく分けることができます。娯楽性を重視す

<sup>8</sup>浦谷年良『「もののけ姫」はこうして生まれた。』

<sup>9</sup>人間の側では、ナゴの守に対する生贄として捧げられたと言われていています。

<sup>10</sup>ここでは現在は絶滅したとされるニホンオオカミを指します。ニホンオオカミという名称は明治になって現れたものです。オオカミの語源は大神です。これは中部、関東の山間部での狼信仰に由来しています。山間部を中心とする農村では、日常的に獣害が存在しており、食害を引き起こす野生動物を食べるオオカミが神聖視されていました。

<sup>11</sup>業病とは悪い行いの報いとしてかかるとされた病気のことです。ここでは社会的に差別されてきた癩者（ハンセン病患者）と思われます。

<sup>12</sup>ジコ坊の場合は、神人・供御人とも呼ばれます。元々天皇家は、遊女、白拍子、舞人、猿楽、武人などの芸能民とともに、各種の職人、宗教人などの非農業民を、遊手浮食の徒、無縁の輩、道々の輩という別の言葉で言い換えて、路上の遍歴民を統轄し、保障する存在でした。遊手浮食の徒と無縁の輩は蔑称で、道々の輩とはそれぞれの芸能（道）をもって、天皇・神仏に奉仕する人々を指します。この言い換えが後の差別に繋がりました。農業が重視されるようになり、定住民が遍歴民を見下す風潮が生まれたのです。

る映画の特徴として、分かり易いストーリーを挙げることが出来ます。この中には、善と悪の二項対立や、ハッピーエンドが含まれます。芸術性を重視する映画の特徴として、メッセージ性を挙げることが出来ます。芸術性を重視した映画の最たるものとしてシュルレアリスム映画を挙げますが、メッセージを伝えるために、時系列やストーリーの整合性を意図的に崩しています。この例は極端ですが、一般に芸術性を重視する映画はストーリーが分かりにくいことが多いのです。善が減び、悪が栄える姿を描くことで、社会への問題提起を行う映画も多数見受けられます。しかし、娯楽性、芸術性という映画を構成する要素は、グラデーション的な分け方です。善と悪の二項対立やハッピーエンドの中にメッセージを込め、芸術に昇華させた映画も数多く存在します。そして、傑作とされる映画には強いメッセージ性があることが多いのです。前回取り上げたチャールズ・チャップリンと、今回取り上げる黒澤明は、娯楽性を重視する映画の基礎を形作った監督たちだと言えます。王道的なストーリー展開を踏襲しながらメッセージを籠める手法は、スティーヴン・スピルバーグや宮崎駿にも受け継がれています。